

# G・グリーンの *England Made Me* について

—— Survival Game ——

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(1991年9月30日 受理)

## 序

いつの時代にあっても社会が時代の変化に併せて変化していくことは自明の理である。従ってその時代に生きる者も時代の変化に併せて生きていくことが要求される。とりわけ大きな社会変動や戦争などのある変化の激しい時はそうである。時代の変動に遅れないようにしていくことが生き残る必然的条件となる。古い時代から新しい時代へ、古い社会から新しい社会へと世の中が移る過程において上手く変化に適応できる者もおれば、古い時代の観念を捨て切れず、時代に取り残される者もいる。見方によれば、彼等の人生はさながら survival game である。しかもこのことは個人にも国家にも当てはまることである。

第一次大戦後、英国においては、アイルランド、エジプト、インド、カナダ等の植民地の独立運動、労働者のストライキ、輸出の不振、世界経済構造の激変によりその国力も、世界における地位も極端に低下した。当然、英国人もこうした事実を認識していたことであろう。Craham Greene もこうした社会のそして世界の変化に気づき、彼の第四作目の *England Made Me* においては個人のそして国家の生き残りの問題をも扱っているように思える。この小論ではアントニー (Anthony)、ケイト (Kate) を中心に彼等がこの時代をどのように生きたかを考察したい。

## Survival Game

アントニーは、姉、ケイトとは双生児であるが、30分先に生まれたケイトは、‘she had, she sometimes thought with a sense of shame, by so little outstripped him in the pursuit of the more masculine virtues reliability, efficiency, and left him with what would have served most women better, his charm.’ この文章から我々は、すでにアントニーが女性的な資質の持ち主であり、男性的な世界で生きていくことには不向きであることを予測する。案の定、中産階級の gentleman を養成する寄宿学校に入れられたアントニーは、gentleman の資質とは程遠いが、男子学生の間ではごく普通の下品な言動をまるで少女のごとく忌み嫌っている。

Feet on the stone stairs, running, scrambling, pushing, up to the dormitory; Kate gone and the room full and the prefects turning out the lights. Not a moment of quiet even at night, for always someone talks in his sleep the other side of the wooden partition. I lay sweating gently unable to sleep, forgetting the pain under my eye, waiting for the thrown sponge, the rustle of curtains, the hand plucking at my bed-clothes, the giggles, the slap of bare feet on the wooden boards.<sup>1)</sup>

寄宿学校は実社会ではないにせよ、子供が親元を離れ、家庭では学べないが、近い将来大人の世界に入るために必要となる諸々の事柄を学ぶ準備期間のようなものである。いうならば人格形成期に誰もが通らなくてはならない大人の世界への関門なのである。しかしアントニーは余りにも繊細な神経の持ち主で、集団の中で生きる力、少々の下品さに耐え抜く凶太さを持ち合わせていない。従って寄宿学校からの脱走は、アントニーの男性世界、すなわち実社会への不適応を示すものであり、女性的な資質を備えた彼の必然的な結果と言わざるを得ない。父親の代わりを務めるケイトの説得によって彼は寄宿学校に戻り, gentleman になるべく教育を受けたが、在学期間中の彼の苦痛は容易に想像できるものである。アントニーが学友との人間関係をどのように乗り切ってきたかは其の後の彼の生活態度が何よりも如実に物語っている。彼には男性特有の冷徹さ、決断力、大胆さ、計画性といったものはなく、容貌や身だしなみ、愛想よさ、口から出任せの調子よさといった女性的な特性だけでその場凌ぎの、或いはその一瞬だけに生きてきたのである。計画性もなく、運まかせで総てのことを運ぶ彼には当然のことながら信用は皆無であり、如何なる職業も長続きせず、詐欺紛いの商売や、ささやかな不正行為、情夫のような生活といった退廃的な生活に明け暮れしている。しかしながら、こうした彼の生活態度の中に我々は、時折、女性が酒を口にすることを嫌ったり、愛のないケイトとクロークの結婚の取り決めに非難したり、ケイトの彼に対する愛の告白を姉弟の、或いは家族の愛情にすり替えようとする占臭さ、音楽を理解できる能力や服装に関する趣味の良さといった中産階級の特性を垣間見ることができる。そして彼自身も中産階級の魅力を十分に承知しており、それを効果的に生活の一手段として利用している。すなわち 'He even promotes himself from his minor public school with an Old Harrovian tie that arouses Minty's indignation.'<sup>2)</sup>

彼は寄宿学校と、'a little bit of England' であり 'He had a profound trust in human nature' であった彼の父親によってこうした中産階級の資質を幼い頃より徹底的に教育されている。その結果、時代が変化しているにもかかわらず、'he was full of the conventions of a generation older than himself.' 彼は潜在的に死ぬまで時代遅れの倫理観に縛られていたが、このような彼をつくりだした旧い倫理観の塊のような父親の権威への反発は、寄宿学校に入る以前は、父親の教えに反する良からぬ書物をこっそりと購入するという形で現れていた。寄宿学校入学後、彼は学校からの脱走を試みるが、この時は父親代わりのケ

イトによって無理やり寄宿学校に戻されたのである。アントニーの性格からして、其の後の寄宿学校での苦痛を考えれば、彼を無理やり寄宿学校に戻らせたケイトの権威に対して何らかの方法での反抗という形を取るのは容易に理解できるところである。そういう意味で現在のアントニーはまさにケイトが作り出したものに外ならない。‘The man’s character, in short, is shaped by the boy’s resentment against a decision imposed on him by his sister’s greater strength of will.’<sup>3)</sup>

アントニーは、外見的には権威に対して真っ向から反抗することはしないが、その権威の認める価値観を陰で否定するような間接的な形での反抗行為と女性的な資質の故に、彼の本来属すべき階級から意識的に離脱したのである。しかし心奥には中産階級の資質を色濃く残すといった矛盾した存在である。それは下度拗ねた子供が本来自分の欲しがっていた品物を親への反抗から拒否しておきながら、いつまでもその品物に未練を持つようなものである。

But Anthony, like Minty, still proclaims allegiance to a system he has hated. He even promotes himself from his minor public school with an Old Harrovian tie that arouses Minty’s indignation.<sup>4)</sup>

この心奥にある旧い倫理観が彼の行動の最終的なチェック機能として働き、墮落した生活を送りながらも彼に ‘There are things I won’t do’ と言わしめる。彼の行動のチェック機能となるこの倫理観をケイトは次のようにみている。

She watched him fascinated. It almost seemed as if there was nothing he wouldn’t do, but she knew that somewhere on that straight steel track down which his brain now so quickly drove there burned a permanent red light; somewhere he would stop, waver, make a hash of things. He wasn’t unscrupulous enough to be successful. He was in a different class to Krogh.<sup>5)</sup>

この矛盾した彼の人間性がアントニーをクログのようなスケールの大きな非倫理的、非合法な行為に走らせない要因となっている。

“Honour,” “love,” “the family,” are words which still evoke in him a response, although it is also a repudiation of all they stand for than he has as shabby as his dress, are no longer able to rule his life, but only to prevent him from achieving success in a ruthless and impersonal world.<sup>6)</sup>

つまり ‘He cannot possibly become serious or pompous about life’<sup>7)</sup>なのである。アントニーの人間性は権威に対する反抗の結果であろうが、更に突き詰めれば、寄宿学校という大人の世界への関門を無事に通り抜けることのできなかった大人に成り損ねた子供のそれなのである。大人の資質を欠く彼 (child’s cunning in a world of cunning men) が大人の

世界で生きていくことは非常に難しいことである。その意味では、彼が‘I haven’t a future’と言うのは彼自身の鋭い自己認識であるといえる。従って弱肉強食の大人の世界で、弱い小動物のごとくその瞬間、瞬間に有らん限りの才覚を発揮して生き延びている彼には将来を計算する時間的余裕はないといえる。だからルー (Lucia) とケイトと彼の関係においてもケイトの愛を——ある批評家のグリーンはアントニーとケイトの近親相姦的な感情をこわがっているとの指摘に対して *Ways of Escape* において、“There was no ambiguity in my mind; the ambiguity was in the minds of Kate and Anthony whom I had chosen for my ‘points of view’”<sup>8)</sup> と述べているように——永続的な肉親の愛 (family love) という古い観念で捕らえようとしたアントニーの欺満性と、ルーとの一時的な、或いは刹那的な快楽により強くひかれる滅びゆく弱いものの必然的な生き様を見る思いがする。すなわち ‘Behind the bright bonhomie of his glance, behind the firm hand-clasp and the easy joke, lay a deep nihilism.’

彼の言動には首尾一貫性、計画性、合理性といった時間的な継続性を示すものは何もない。そうした彼の言動が彼を出鱈目な人間と我々の目に映るようにしている。しかし職を転々としようが、彼の嘘が、詐欺行為が見破られようが、本来、男性の世界で生きる資質を欠く彼にとっては、唯々日々を刻一刻を生き延びることが勝利なのである。

ミンティ (Minty) もアントニーと同じく、彼の属する階級からの「落ち零れ」である。彼も Harrow の学生時代に彼の階級から落ち零れたのである。彼はアントニーと違って、大人の狡猾さ、執拗さ、下品さ、辛辣さといった常に隠された部分にある資質も十分に身に付けているが、ただ人間性の中に在る或ものだけをアントニーと同じく身に付けることができなかった。それは、アントニーが大人の「醜」の、或いは「負」、若しくは「悪」の資質を受け入れられなかったように、性的な意味での大人の erotic、或いは sexual な面を受け入れられなかったことにある。彼はケイトやルーとの対面の折りにも女性に対して ‘he despised scent, silk stockings, powder, salve,’ ‘He didn’t know how to talk to her; she was a woman, and just because she was a woman she woke his malice.’ といった強い嫌悪感を示している。否、彼は人間の肉体そのものにすら嫌悪感を覚えている。

Yes, it was ugly, the human figure. Man or woman, it made no difference to Minty. The body’s shape, the running nose, excrement, the stupid postures of passion, these beat like a bird’s heart in Minty’s brain. Nothing could have more stirred his malice than the sight of Gullie poring over the photographs of naked breasts and thighs.<sup>9)</sup>

To use powder, to take such care with one’s clothes, to be so carefully brushed, the hypocrisy of it sickened Minty. The body still remained, its functions were not hidden by Savile Row. To think that God Himself had

become man. Minty could not enter a church without the thought, which sickened him, which was more to him than the agony in the garden, the despair upon the cross. Pain was an easy thing to bear beside the humiliation which rose with one in the morning and lay down with one at night. He stood and dripped at the carpet's edge and thought that at least one need not be so coarse as to love the body like Gullie or hide it under powder and pin-striped elegant suits like the Minister to look up, exposing his shabbiness with a mournful malicious pride.<sup>10)</sup>

アントニーと同じく体力的に弱い立場にあったミンティーは、やはり寄宿学校という弱肉強食の大人の世界の現実を教える場所で、‘It was only that Minty had more selfcontrol. The twisting of his arm had taught him it, the steel nibs dug into his calf, the spilt incense and the broken sacred pictures.’ 学校仲間の彼に対する攻撃の原因はミンティーが余りにも英国的宗教 (Anglo-Catholic) に傾倒していることであり、それが英国の伝統的学校から彼が追放される原因となっている。つまり、彼の余りにもアングロ・カソリック的なことがアングロ・サクソンに受け入れられなかったという強烈な皮肉がここにみられる。ある意味では彼こそ最も英国人的な英国人であり、その彼が疎外されるということは、すでに英国人の英国人たる本来の資質に変化の兆しが見えだしたということなのかも知れない。彼やアントニーが旧き良き英国を象徴するものならば、‘What Greene is attempting, in fact, is nothing less than an examination of the roots of Englishness below the surface of manners,’<sup>11)</sup> ということになるかも知れない。

寄宿学校での共同生活が丁度アントニーに権威に立ち向かうのではなく、権威に背を向ける生活態度を取らせるように、ミンティーも屈辱に耐え忍ばざるを得ず、彼の其の後の皮肉っぽい拗ねた性格を形成した。ミンティーがアントニーと違うところは、彼も強いものや権威に真っ向から対決することはしないが、通信販売の薬品を使ってこっそりと彼を苛めた級友に復讐したり、アントニーを殺害したホール (Hall) に面と立ち向かった時、‘He barred the way, scraping his sore tobacco-bitten tongue along his teeth, aware of revenge wilting in the common everyday air until it became no more than the will to vex, tease.’ ように人生の色々な物事を斜めにしか見れなくなっていることである。

The Pain and suffering at school were a foretaste of the contempt and mockery of the world. Minty has taken this poison in small doses for such a long time that, like Mithradates, he has no hopes or ambitions and confronts an alien world with his malice.<sup>12)</sup>

しかし、本来、彼も、神への敬けんな信仰が示すように、アントニーと同じく人間への限らない優しさと善良さを持っている。

更にミンティーは、学校から追放されたのみならず、家族の恥でもあるかのように、英

国に帰らぬ保証金のような形で、外国での生活の足しにする毎月の送金 (remittance) を受けることによって英国から追放されている。加えて同じハロー出身のストックホルムにいる英国公使ロナルド卿 (Sir Ronald) やガリー大尉 (Captain Gullie) からハローの「落ち零れ」として軽蔑されている。彼にはアントニーのことを心配するケイトのような彼のことを心配してくれる者もなく、貧しさとみすぼらしさと孤独のうちに細々と生きている。自分には将来も夢もなく、世間の食み出し者と自覚しているアントニーですらミンティーの部屋を訪れた時には、'He (i.e., Minty) was so lonely, so isolated that he drove the others (i.e., Anthony and Lucia) back into the companionship they had lost; even a shared uneasiness, a shared bickering, had a friendly air compared with his extreme friendlessness.' と感じるくらいであった。ミンティーも物理的には完全に英国からも、彼の本来属すべき階級からも追放された人間である。しかし精神的には決して英国からもハローからも離脱しているのではない。

Ex for All, thought Minty. The school phrases stung his lips, but they were always first to his tongue. It gave him a bitter tormented pleasure to say, not an afternoon free, but Ex for All. He hated and he loved. The school and he were joined by a painful reluctant coition, a passionless coition that leaves everything to regret, nothing to love, everything to hate, but cannot destroy the idea: we are one body.<sup>13)</sup>

そして彼のストックホルムのアパートには寮生の写真、校友会雑誌、ミサ典書、マントルピースの上にはマドンナ像、そして堅いベッドといったものが配置され正に彼のハロー校時代の宿舎の部屋を思わせるものである。彼は英国に帰ることを拒否され、スウェーデンのストックホルムという地に島流しになった人間であるが、クロークの詐欺的経済活動の本質を見抜く眼力を持っているだけあって、彼自身の追放された、或いは疎外された立場について痛いほど強く認識している。

'Oh, for God's sake,' Loo said, 'talk about the present. Don't talk about the past all the time. That's what's wrong with you both. Haven't you got futures?'

'Frankly,' Minty said, 'no. We wouldn't be here if we had a future.'

'Why not? What's wrong with Stockholm?'

'It's not London,' Anthony said.

'No, it's not London.'<sup>14)</sup>

ミンティーもアントニーと同じく将来のない人間である。唯、彼の言葉を借りれば、世間の信用度を別にすれば、彼とちっとも変わるところがない世界的に注目を集めているクローク (Krogh) だけが彼に生計の道を立てる材料を提供してくれる人物となり得るので、

そのクローグにしがみつき、クローグに関するあらゆる事柄を漁り、一行何クルーナかの僅かな記事にして新聞社に売り付けるフリーの記者としてストックホルムという異国の都市のアパートの一室で、部屋の嗽コップの中に閉じ込められた蜘蛛のように神の手によって救われない限り、時間と共に干からびてゆく生を生き続ける孤独な戦いを戦っているのである。

クローグは貧民の子として生まれ、こつこつと勉強し、ひとつひとつ免状を取得してきた根からの努力家なのである。彼が新式の裁断機のアイディアを思い付かなかったら、アンダーソン (Anderson) や鉄橋の工事に従事している工事人 (Elick) やその親方のような労働者階級の一員として平凡な人生を歩んでいたことであろう。しかし彼は努力家であったために裁断機の改良で巨万の富を手にし、今では経済活動に没頭し、クローグ社を世界的な企業に育て上げた経財人である。仕事に関しても研究熱心な彼が経済に対しても熱心に研究し、成功を取めたことは何等不思議なことではないが、経済活動とは飽くまで利潤の追求がその目的であり、人間性が考慮されることのない数字の世界なのである。機械と数字のみを扱ってきたクローグはケイトに言わしめれば、*'He thinks in figures, he doesn't feel vague things about people.'* 彼はアムステルダムにいるホールと国際電話で株価操作の話に入った時、*'He was quite happy again because he was dealing with figures; there was nothing he didn't know about figures, there was nothing he couldn't do with them, there was nothing human about them.'* 彼は正に数字の魔術師であって、彼の操作する実体の伴わない数字の変化に世界の企業が、人々が反応するのを楽しんでいるようである。しかもその虚数が彼の、そして会社の信用となり、価値となっているのである。

*'There are values and values,' Krogh said gently. 'Value isn't a thing you can measure, Value is confidence. As long as we receive money, we're valuable. As long as we're trusted.'*<sup>15)</sup>

しかしその価値も信用も単なる数字の魔術によって生み出されたものであり、実体を伴っていないので永続性はなく、クローグ一人の手腕に頼っているものなのである。総ての価値と信用が彼の個人的な手腕に掛かっているだけに彼には失敗は許されないし、誰かに相談することもできない状態にある。従って事業の失敗は彼自身の身の破滅、すなわち彼の自殺となる以外の道はない。

*If he died tomorrow the company would be broken. The intricate network of subsidiary companies was knitted together by his personal credit. Honesty was a word which had never troubled him: a man was honest so long as his credit was good, and his credit, he could tell himself with pride, stood a point higher than the credit of the French Government.*<sup>16)</sup>

数字を自在に操れるクローグは、経済活動が非常に活発になりだした第一次大戦後の資本主義社会が生み出した新しいタイプの人間である。いうならば四六時中非人間的な対象を扱う余り数字万能主義に陥り、人間性を喪失していった upstart 的階級、すなわち新興勢力に属する人間なのである。彼が人間性に欠けていることは、他人との会話を不得手とし、音楽や詩、ドラマを全く理解せず、ケイトとの結婚も愛情からではなく、妻による裁判所での証言能力を無効にする意図から決めたことから理解できる。更に、昔の彼と全く同じ階級に属するアンダーソンの父親には平気で嘘をつき、約束を破り破廉恥にも彼を解雇し、真意を確かめに来た息子のアンダーソンにはホールを使って暴力的に排除するといった非人間的な手段を用い、会うことすら拒むのである。極め付けは、クローグ社が短期融資を受けていること、帳簿の不正操作をおこなっていることを知ったアントニーをホールが殺害することも黙認している。そこには正義も人間性もなく、経済活動が総てに優先している。彼自身には強い自己認識がなくとも、彼が非人間的な経済活動にのめりこみ、成功すればするほど、その代償として人間性を喪失していったのは事実である。

I have been too taken up by finance, I must enlarge my scope – the human side. He told himself: there must have been a time when I was at ease with other men, and tried to remember, but he could recall only the water dripping off the oars, his father silently waiting, the early light, the weary return.<sup>17)</sup>

その無くしたものが彼の不安を掻き立てる。‘he was obscurely troubled by the idea that he had neglected something.’ 彼が無くしたものは彼が本来属すべき階級の人々に生来的に備わっていたものなのである。彼はもうかつての階級に属する人間ではなくなっているのである。彼はそのことをアントニーそしてケイトの三人でホテルに食事に行く途中の鉄橋工事現場にさしかかった時、クローグ自身もかつてはこのように鉄橋工事に従事していたことがあったので、鉄橋工事を携わっている彼等に話かけようとして実感している。

‘They have to work at night because of the trains,’ he said. ‘They still get their brackets from Chepstow. Things don’t alter much.’ But he was altered, Kate thought. The sight of him standing on the track, interested in spite of himself, without matches when he was asked for them, without words to explain what he wanted, disquieted her. They moved slowly past the gang and he did not look out again; they had stayed the same, but he had altered.<sup>18)</sup>

エリック・クローグも彼の属すべき階級から自己認識のないまま離脱した人間なのである。つまり、アントニーやミンティーと同じく、逆の意味での「落ち零れ」なのである。ミンティーはクローグも本質的には彼やアントニーと同じく孤独な存在であることを認識



しており、‘he’s only one of us. He has no more roots than we have.’と言う。クローグはクローグなりに失敗の許されない彼の survival game を戦っているのである。クローグのそうした状況をクローグを利用して彼女なりの survival game を戦っているケイト自身が最も強く認識していることでもある。

Kate leant over his shoulder – we’re a family party, one of us, I’ve used him and he’s used me, but he’s one of us, only a damned climber after all, as we are- . . . .<sup>19)</sup>

第三部第四節のクローグとスウェーデン皇太子の両者のオペラ観劇の場は、この小説のモチーフが最も具体的に具現されている部分であると考えられる。則ち、皇太子は旧い社会の持つ伝統、持続性、或いは旧支配階級の持つ教養、知性、品位といったものを象徴する存在である。一方、クローグは、非常に高価なものであるにもかかわらず、‘His evening dress fitted him badly about the shoulders; there was a touch of vulgarity in the diamond studs which did not seem to belong to him; it was as if he were wearing another man’s clothes, another man’s vulgarity.’ 服装の趣味の悪さ、音楽も詩もオペラも理解できず、オペラについて質問をされることを恐れて、自分の座席の周りの座席を買い占め、観劇中に居眠りをする様子からして、彼はオペラを観賞する階級の人間ではない。彼は皇太子とは全く逆の経済や数字や機械のみに強い非人間的なコンピューターのような新しい存在、永続性のない一匹狼的な upstart の典型として描かれている。

たとえクローグが教養のない品位に欠けた upstart であろうと、経済、則ち「金」は明らかに現代人の強い関心を引いていることも確かである。

The interest of the theatre was divided between the box and the stalls where Krogh sat, between rank and money; Anthony got the impression that money won.<sup>20)</sup>

クローグへの関心の強さは20世紀以後の社会はそれまでの社会とは異なった非人間的な要素である経済がより大きく我々人間の生活に関与してくることを示唆するものである。

ケイトは、アントニーと双生児であり、人間的資質においては彼等が大人になるまで互いに霊的な交信が行えたことから、同質のものを有しているといえる。従って、アントニーに対して親代わりの役を務めていた頃は彼女の育ちからして中産階級的倫理観、価値観を身に付けていたことは当然のことである。それ故に寄宿学校を脱走したアントニーの繊細な女性的資質を理解しえず、彼女が良いと信じる中産階級の価値観や倫理観を修得させようと彼を彼には向かない寄宿学校に無理やり帰したのであった。その時点での若い彼女の判断を誰が非難できるだろう。其の後彼女自身も親を無くし、頼るべき者もないこ

の世で一人生きていくために懸命の努力を重ねている (She had grip, she held on. Five years in the dingy counting-house in Leather Lane, then Krogh's, and later Krogh)。彼女は男性社会で生き抜くあらゆる資質を備えていると言っても過言ではない。アントニーとケイトの人間的資質を入れ替えれば、それが本来の二人の真の姿であるといえる。つまり、ケイトが二人の人間的資質の「表」、或いは「正」、若しくは「優」の部分の意味するものであれば、アントニーは「裏」、「負」、「劣」を意味するものである。従って、ケイトにとってはアントニーの持つ資質は彼女が生まれる際に残してきた「負」の半身ともいえる。

He was more than her brother; he was the ghost that warned her, look what you have escaped; he was all the experience she had missed. He was pain, because she had never felt pain except through him; for the same reason he was fear, despair, disgrace. He was everything except success.<sup>21)</sup>

彼女は、本質的には第一次世界大戦以前の旧き良きイギリスの中産階級のあらゆる資質を備えた人間であるが、その彼女の本質を殺し、涙ぐましいまでに努力し、彼女の資質とは相容れない新興勢力の価値観を容認し、その勢力と結託するのは、ひとえに本来の自分であったかもしれない、彼女の責仕によって生じた憐れな half-self、アントニーの救済のためであると同時にアントニーへの異常なまでの思慕の念から生じる彼を独占し、彼を身近においておく条件を整えるために他ならない。彼女のアントニーに対する愛情は明らかに近親相姦的な愛であり、旧い倫理観からすれば罪悪であるが、あえてそうした行為に向かえるところに彼女の底知れぬバイタリティーを見る思いがする。彼女にとっては、'herself incomplete without Anthony' なのである。彼女が'there was nothing I wouldn't do for him' と言うように、彼女には目的のためには自分の価値観を破棄し、新しい価値観に迎合するよう努力できる精神的な柔軟さ、大胆さ、決断力、更に相手を利用するしたたかさを備えている。

She was suddenly touched by the pity one is compelled to for anyone who has been mercilessly 'used'. She had used him from the start, from the first day in Hammond's office; she had recognised what he needed and she had supplied it with no other end in view than this: Anthony downstairs talking to 'the fellows', presenting her with her own flower, Anthony making himself at home.<sup>22)</sup>

彼女が、クローグ社の抽象的オブジェの泉水をアントニーが嫌がったのとは対照的になんら奇異に感じなかったのは彼女のそうした精神的な柔軟さ、環境への適応性、時代への順応性を示すものである。その結果、彼女は彼女の階級の倫理観からすれば、墮落と考えられるようなクローグの情婦となり、クローグの力を借りてアントニーを不安定な生活から

救い出すために彼の属している精神的な階級からの離脱を、時代に呼応して非人間的な新興勢力の価値観の容認を彼に迫る。彼女は現代社会がもはや過去の時代の社会とは異質なものになろうとしている変化を鋭く認識する能力を持ち、大胆にも意識的に自らの質的变化を図り、自分一人ではなく、アントニーの生き残り策まで考えている。

Good Looks and Consience, she thought, the flowers of our class. We're done, we're broke, we belong to the past, we haven't the character or the energy to do more than hang on to something new for what we can make out of it.<sup>23)</sup>

そうした彼女の激しい変化は、旧い因襲的な観念に囚われたアントニーには、ケイトは能率的で、立身出世のためには手段を選ばない人間としてしか理解できないし、彼に彼女のようなスケールの人間を理解することは無理である。こうしたケイトとアントニーの資質の違いを Derek Traversi は次のように見ている。

Anthony and Kate Farrant are bound together by memories of a common education, to which, however, they have reacted in contrasted ways; and in their reaction the author has sought to polarize two worlds, two conceptions of society, whose simultaneous existence is a reflection of the state of contemporary man.<sup>24)</sup>

アントニーの旧い殻を破り、激しく変化している現代社会の本質を理解させ、彼女を通して旧い世界と新しい世界との融合を図る彼女の努力をグリーンは次のように描写している。

...but with all her intellect she claimed alliance with the present, this crooked day, this inhumanity; she was like a dark tunnel connecting two landscapes, on one side the huddled houses, the backs with their washing and their splintered window-boxes, on the other—<sup>25)</sup>

しかし寄宿学校と家庭の教育によって完全に一世代前の倫理観を曳きずって生きている33歳にもなった彼に質的变化を求めることはどだい無理なことである。‘Her passionate devotion to him, unfortunately, blinds her to Anthony’s inner urge for a kind of life which she cannot provide.’<sup>26)</sup> 彼女のような有能な人間からすれば、少々の非人間的な要素に目を瞑れば、生活の安定を図れる手段が手に入るにもかかわらず、それを拒否するアントニーの気持ちは理解し難いものであろう。しかしアントニーの総ての思考、行動の下には常に旧い倫理観が脈々と生き続けている。彼はそれ程旧い人間なのである。

...it is his own subjection to the “conventions” that prevents him, in the long run, either from following his own instinct to “break away” or from accepting the solution

she has proposed for him.<sup>27)</sup>

ケイトはアントニーの救済の為、彼女の人生の総てを賭けて今日まで努力してきた。彼女自身が造りだしてしまった彼女自身の「負」の half-self であるアントニーの救済は彼女自身の救済でもあった。しかし彼女がアントニー救済の拠所として是認した非人間的な新興勢力の価値観によってアントニーを失ったことは、彼女自身が survival game に破れたことを意味するのである。彼女が失った half-self を彼女のものにするには彼女自身がその「負」の half-self になる以外に道はない。

## 結 語

かつての英国は世界を支配し、世界の各地から得た富で英国国家や社会を支えてきた。英国人の持つ伝統や教養、品位や芸術、学識や倫理観といったものはこうした外国から得た富の上に築かれたものである。しかし植民地では富を得るため現地の住民を搾取し、苛酷な労働を強要するといった非人間的な方策が採られていたことは周知の事実である。富を得る過程には常に非人間的要素が伴うものである。クロークが君臨する現代の経済界が非人間的であるように見えるのは、電話や電信等のより進歩した手段によって経済活動がなされることによって、かつてより実際に富を得る側と失う側の間に介在する人間的要素が減少して、事務的に処理されるようになったためで、本質的にはなんら変わるところはない。むしろ旧き良き英国の中産階級の英国人（グリーンも含めて）はそれまで搾取されているアンダーソン親子や鉄橋工事に従事している労働者のような植民地の人々や、英国内の労働者そして小作農の姿が直接目につかない場所にいただけであり、以前の方が苛酷であったとさえいえる。

The argument implicit in the narrative that old forms of exploitation as practised in the old imperialisms of France and Britain were tempered and mitigated by a sense of justice, chivalry, culture and respect for human rights and were therefore superior and preferable to the soulless and single-minded speculations of Krogh wears thin when seen from the point of view of the exploited.<sup>28)</sup>

英国が次々と植民地を失い国力が衰え、逆に勢いを増した世界経済の波が英国にも押し寄せて来て、搾取する者と搾取される者の関係が身近に見られるようになった時、個人であれ国家であれ、何時までも旧い観念に固執するのではなく、経済の持つ非人間的な要素を認識し、英国の旧き良き伝統を守りつつ、新しい世界の局面も受け入れる柔軟な精神構造を持たなくてはならない。

Kate Farrant's candour, her ability to face the strengths and weaknesses of her upbringing, and her cold-blooded attempt to find a place in the new

world reveals prophetically that England at the time was unprepared for the ruthless pragmatism of postwar global change.<sup>29)</sup>

更にもう一点グリーンの各々の小説の主要なテーマとはなっていないが、彼の全作品を通して考えるならば、決して軽視することのできない問題であると思われる一付け加えておくならば、生き残るためには新しい時代の変化に柔軟に対処できる精神構造を持つことが最も大切なことであるが、同時に人間性のなかにある原始より宿る動物的な要素も受け入れなくてはならない。「性」は動物の生命の継続には必然的なものである。ところが *England Made Me* においては、ケイトの不妊、クローグとケイトの愛のない政略結婚の取り決め、ミンティーの極端な女嫌い、アントニーとケイトの近親相姦的な愛、ホルのクローグに対する homosexual な愛、アントニーの性の一時的な悦楽を求める姿勢などに見られるように正常な愛の形は何処にも見受けられない。このことは *England Made Me* に限らず、グリーンのそれ以前の作品、その後の作品についても言えることであるが、グリーンが夫婦の愛や家庭というものに否定的な考え方を抱いていたのではないかと疑わざるを得ないのである。そうした愛の不毛がグリーン作品の“seedy”な雰囲気をかもしだす要因となっているのかも知れないが、正常な性の形態を否定する者は生存競争社会においては必然的に敗者になる運命を背負うことになるだろう。

#### 〈注〉

- 1) Graham Greene, *England Made Me* (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1986) pp.14-5
- 2) Kenneth Allot and Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York: Russell & Russell, 1963) pp.108-9
- 3) Derek Traversi, “Graham Green: The Earlier Novels” in *A Collection of Critical Essays*, ed. Samuel Hynes (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1973) p.22
- 4) Kenneth Allot and Miriam Farris, pp.108-9
- 5) *Ibid.*, p.178
- 6) Derek Traversi, p.21
- 7) John Atkins, *Graham Greene* (London: Calder and Boyars, 1966) p.54
- 8) Graham Greene, *Ways of Escape* (London: Penguin Book, 1987) p.32
- 9) Graham Greene, *England Made Me* p.107
- 10) *Ibid.*, p.103
- 11) Grahame Smith, *The Achievement of Graham Greene* (Sussex: The Harvester Press, 1986) p.123
- 12) J.P.Kulshrestha, *Greene: The Novelist* (New Delhi: Macmillan India Limited, 1977) p.52
- 13) Graham Greene, *England Made Me* p.99
- 14) *Ibid.*, p.154
- 15) *Ibid.*, p.163
- 16) *Ibid.*, p.38
- 17) *Ibid.*, p.56
- 18) *Ibid.*, pp.195-6

- 19) *Ibid.*, p.196
- 20) *Ibid.*, p.109
- 21) *Ibid.*, p.11
- 22) *Ibid.*, pp.171-2
- 23) *Ibid.*, p.166
- 24) *Ibid.*, p.21
- 25) *Ibid.*, p.171
- 26) J.P.Kulshrestha, p.23
- 27) Derek Traversi, p.22
- 28) Maria Couto, *Graham Greene: On The Frontier* (London: The Macmillan Press LTD., 1988) p. 93
- 29) *Ibid.*, p.97

## On *England Made Me* by G. Greene

—— Survival Game ——

Toshihiko UEKI

*Faculty of Liberal Arts and Science,*

*Okayama University of Science*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1991)

It's natural that society should change itself keeping pace with the times. Therefore, people living in a certain characteristic age are also required to live with changes of the times. It is an inevitable condition to survive in the period difficult to make a living. In the process of changing from old to new times or from old to new society, there are some who can adapt themselves to social changes, and others who stick to the old moral and idea and are left behind. In some way, we may say these people struggling for existence in such a society are fighting their survival games. This holds true in the case of a person or a nation.

After World War I, the status of England in the world excessively came down because of the independent campaigns in Ireland, Egypt, India and Canada, strikes of trade-union, stagnation of export and the drastic change of the world economic system. The English would have recognized these changes. Graham Greene had also noticed these changes and in his fourth novel, *England Made Me*, dealt with the theme of survival. In this thesis I want to examine how Anthony and Kate who were twins and the characters in the novel above-mentioned, lived in the dramatic age.